

# 和歌森太郎の木曜会加入前における修験道研究

第42回日本山岳修験学会飯田学術大会 2022/10/23

由谷 裕哉（金沢大学客員研究員・小松短期大学名誉教授）

はじめに；近年の『修験道史研究』評価

時枝務氏；戦時下における尚武の風潮＋「近世的変質論」につき辻善之助の近世仏教墮落論の影響を指摘（『近世修験道の諸相』岩田書院，2013）

長谷川賢二氏；修験道を「中世的宗教」と規定したが，3段階の成立のうち第3の教派的形態の成立と「中世的宗教」観とが齟齬（『修験道組織の形成と地域社会』岩田書院，2016）

（発表者は今年に入って...）；本年5月刊の『大洗の本』第3号用に執筆した「和歌森太郎の一九四二年大洗調査」準備の過程で、『修験道史研究』についても先行研究とは違う捉え方ができるので，との感触を得た；＋『和歌森太郎著作集』別巻（弘文堂，1983）などの不正確さにも気づく。

1939年3月とされる彼の東京文理科大学卒業以降の関連事項

1939.8「日本上代山岳信仰の形成」1，『歴史教育』14-5；のち2が14-6(9月)，3が14-7(10月)；  
←従来云われていた刊行年月は誤り。

1939.9「中世修験道の前景とその成立」1，『史潮』9-3，のち2が9-4(12月)

1939.11「小島法師について」，『歴史と国文学』21-4；←従来云われていた号数は誤り。

↑柳田門下となる前は，ここまでか。

1939.12 入営し，北支へ。

1940.9 胸膜炎により現役免除となり帰朝（本人の回顧では同年7月であるとも）。

1941.4『民間伝承』6-7の民間伝承の会「新会員紹介」に和歌森の名が出る；つまり加入はその前。  
加入前か後か不明だが，「教派修験道の形成とその特性」（『宗教研究』3-1<1941.4>），および「中世修験道の近世的変質」1，2（『歴史教育』15-2<1941.5>，15-3<同年6月>）

1941.5 この頃から木曜会に参加，と（『民俗学のすすめ』河出書房新社，1965，p.290）。

1941.9「中世修験道の理念と説法」，『国文学解釈と鑑賞』6-9；←『修験道史研究』の主要パートはここまで；《以下略；『修験道史研究』結語“補訂”は1942.8，“序”に記載の年月は1942.10》

『修験道史研究』初版と初出論文との対照

{まず，本発表で直接触れない箇所から；附録除く}

第3章 教派修験道の形成と特性；←『宗教研究』1941.4

第4章 中世修験道の近世的変質；←『歴史教育』1941.5-6

結語（書き下ろしか），1941.8記銘，1942.8補訂と

{本発表で検討する箇所について}

緒論（書き下ろしか）

第1章 修験道の由来

序言（書き下ろしか）

第1節 役小角と上代山岳宗教；←『歴史教育』14-5，6(1939.8,9)，一部『史潮』9-3含む

第2節 新仏教と山岳修行の特殊化；←『史潮』9-3(1939.9)+『歴史教育』14-7(1939.10)

第2章 修験道の成立と特性

序言（書き下ろしか）

第1節 山臥の特異性成立とその性格；←『史潮』9—4 (1939.12)

第2節 修験道の理念と説法；←『解釈と鑑賞』1941.9

気づくこと3点ほど

- 『修験道史研究』イコール修験道の中世的性格，というのがこれまでの捉え方だったが，入隊前に投稿したのは第1章(古代)と第2章第1節(中世修験道の前景とその成立)まで；『史潮』9—4末尾に「入隊十日前校了」とあり，戻って来られない覚悟もあったのでは。
- 修験道成立を踏まえた第2章第2節(中世修験道の理念と説法)は，木曜会加入後(1941.9)。
- 1939年の3論文に関しても増補がかなりある。かつ，緒論と結語は(木曜会加入後の)新稿。

増補箇所例

**第1章第1節** 二 奈良時代の山岳仏教

p. 32 (役小角に関して，津田左右吉による呪術を駆使することの支那での表現として「鬼神」を説明した後)；しかし，更に考へると，かういふ鬼神といふ類は，「山人」に極めて近い存在であり，山中棲息する妖怪のものと見做す傾向が支那や日本には濃いのであるから，ひとしく呪術を自在に行ふことの表現だとしても，特に山間で或は山林を背景に行ふ呪術についてかういふ擬人的表現を示したものであらう；《←これに先だってp.25で，柳田「山人考」を参照するのも，増補箇所》

**第1章第2節** p. 87で熊野夫須美神について「牟須美<sup>ムスミ</sup>の転であり，それは又産靈<sup>ムスビ</sup>に帰すること容易に知られるところである。即ち，この神は熊野における凡ゆる神々森羅万象の生産を保障したといふ立場におかれる最高根源の神なのである」（『歴史教育』14—7，p. 37通り）の注として；

p. 88；ムスビの神は，直接創造生産をされる神ではなく，ある生産創造のはたらきの背後にあつて，これを守護し安全に保障なさると信じられた神である。常民の世のことはを以てすれば，誕生を守られるウブ(産)神にあたる神であられる。拙稿「産神・氏神・祖先神」（『國學院雑誌』四十八ノ六）参照；《←1942年刊，産神が産土のように考えられたのは後世的で，氏神の祖先神化も後》

**第2章第1節** p. 154で山臥の本性・外貌・社会的活動が天狗の観念を連想させると論じたうえで；

p. 155；(前略)文献の関知しないやうな辺鄙にある常民の社会にあつては，なほ今日まで山男，山人即ち天狗と観念して種々奇譚を伝承してあること著しいものがあり，その山男，山人の類は頗る山臥と融通したものであるから，山臥＝天狗観はまだ生き生きと遺つているところがあるのである。このことは柳田國男氏の「山の人生」を一読すれば忽ちに諒解されるであらう。

書き下ろしと思われる文言例

**緒論** p. 3「一般に山に対して寄せる崇敬」につき，まず神奈備の山，次に神の宿る所としてのモリについて触れた後(後者は，柳田「塚と森の話」<1912>を連想させるが...)；

p. 5；「山の神」といふものは畢竟山を支配する神であるが，農民のいふ山の神は，春には山から里に降つて田の神となり，秋には再び山に帰つて山の神となるとされている；+この文言に注記して，p. 6に「柳田國男氏「山の人生」一五二頁」とする。

小括；読者の多くは，柳田の影響による部分+和歌森が構成に苦労した第1章を無視し，中世山伏の凄絶性，すなわち苦行性，といった第2章pp. 138-146の主張(ほぼ『史潮』9-4通り)に影響受けたか。